

有名キャラ官能小説CG集第310弾!!!

私と一緒にぶっ飛ばんじやおうよ!

HaHaCGSYU

Win
95/98/ME

Win
2000

16 MB
Memory

800×600
65536 Color

マウス

キーボード

CG集

成年向























「なんて…強さなんでしょう?? カミツレちゃんと一緒にこんなにも…ッ」

フウロが驚嘆するのも無理もない。

なにせ2対1のバトルで敗北、しかもこちらはそこらをウロウロしているようなレベルではない、ジムリーダー2人がかりだったというのにだ。

「…フウロちゃん。ここはわたしが時間を稼ぐから、あなたは——」

「残念だけど、逃がさないよ。2人とね」

カミツレが腹をくくるより先に、Nが仕掛ける。

見たこともないモノがモンスターボールから飛び出したかと思うと、フウロとカミツレに向かって触手を飛ばした。

「なっ!?!」

カミツレとしては、フウロのほうが動きがよく、助けを求めるにふさわしいと考えていた事だろう。

仮にNがいかなポケモンで追撃しようとも、

フウロなら逃げ切れるし、時間を稼ぐくらいなら自分一人でも可能な算段だった。

だが眼前を覆いつくす奇妙な何かが広がり襲ってきた事で、完全に驚きの表情のまま体も思考も停止していた。

「えええっ、な、なんですかこれ!?! アタシに絡まないでくださいッ」

フウロも驚いてはいる。が、まだ硬直するほどのものではなかった。

とにかく襲い掛かってくる正体不明の何かを払い、カミツレと二人、安全を確保しようと試みる…しかし

「んううう!?! あっ、な、何これはっ…なぜそんなところに巻きついてッ!?!」

「カミツレちゃん!! こらあっ、アナタ! カミツレちゃんをはなしてくださいッ」

カミツレは太ももの付け根に絡んだ触手に、思わず頬を赤くする。

股間のアソコをこすられ、恥ずかしさが込み上げる中、フウロが両手で掴んで触手をはずそうとしてくれていた。

「い、いいから! わたしは平気だから、あなたは逃げてっ!」

「いやーだー、カミツレちゃんを置いてはいけませんッ! あうっ…うう、アタシは、負け…ないっ」

見れば既にフウロの足首には触手が絡みつき、両太ももにまで巻き上がっている。

そう、逃げようにも逃げられなかったのだ。

「んー、んー! ど、どんな事をされたって! はーはー、アタシは…ッ、ううー!!」

ズムズムン…ズグッ…ドモグッズモモモモモモ…

「!!! ふ、フウロちゃん、あなた…っ」

カミツレの位置からだど当初触手はフウロの太ももまで巻きついている"だけ"にしか見えてなかった。

だが、彼女のカラダの角度が少し変わった時、その股間の大事な穴に、別の触手が入り込んでいっている事に気づく。

「えへ、えへへへ…はあはあ、だ、大丈夫です。カミツレちゃんだけは、アタシが…た、助け、ますっ」

「——無理だと思うよ。二人とも、助からない…から」

第三者の声の主、それはNではない女性のものであった。

二人は声のした方へと同時に振り向く。すると、触手の塊のようなものがそこにあり、グバァッと割れるようにして開いた。

「あ、あなたは…」

「!!!」

「…2年前、彼と勝負して…負けた。あなた達同じように。そして——」

グチュルルルッ!!

トウコのアソコには深々と触手が突き刺さっている。

下腹部の表皮に中にどんな風に入り込んでいるかが見てとれるほど、内包する触手の形に膨らんではへこみ、うねっていた。

「孕まされた…。この"ポケモン"を」

「え!?! はあ、はあ、こ、これはポケモン、なんですか!?!」

フウロは自分のマンコを貫く奇怪なモノを改めて見直す。

どンドン詰め込まれてくるモノがポケモンだなんて、にわかには信じられなかった。

「うう…気持ちの悪い。こんなポケモンがいたなんて、わたしは知りません」

脚が持ち上がり、自分の中にも挿入いたがろうとしている触手。

カミツレは犯されてしまう事はもはや避けられない事を悟り、せめてコレについて視線から暗にトウコに情報を求めた。

「Nは言っていたわ…このポケモンは作られたモノ。本来は存在しない、寂しくて可哀相なポケモンだって」

「へうんっ!!! おぶっ…はあはあ」

「大丈夫、フウロちゃん!?! …だからって、私達を」

このポケモンにささげるとも言うの?

トウコにはカミツレの言葉を待たずして彼女の問いたい事は理解できた。

「2年前から、私はこのポケモンに犯され続けてる。何度も何度も孕まされて、産まされて…」

「あうっ、あっあっ! うぶぶ…じゃ、あ…彼は、このポケモンが可哀相なので、アタシ達で増やそうと?」

強い圧迫感がお腹いっぱいになり、苦しさを覚える中、フウロもできうる限り話を聞こうとする。

今すぐ逃れられないにしても、脱する事をあきらめるわけにはいかない。

「優秀なトレーナーでないダメだからって。(はあはあ…このコ達は、キチンと私達から学習して生まれてくるって)」

トウコがビクッとして奮える。

まるで我慢していた尿意が、ついに放尿に至れた時のような恍惚とした表情を浮かべながら。

「はあああ…また、"デキた"…はあはあ…、ん…あ…。こう、して…このコ達は増えながら、より完成されたポケモンに…」

「なんてこと…ん…。く…まさか、そんな事のために、あなたやわたしたちのカラダが…んっ、う…」

「はあぜえあうっあうっ! …うう、ポケモンの…お母さんにされてしまうのですねアタシ達? (はあはうう?!)」

不意にフウロの様子に変化する。

ドブンッと一揺れした胸が少しずつ揺れ幅を縮め、完全に静止した次の瞬間——

「あああ!?! はあっ、あっ、いっ、ふんおおう…ッ、ほ、ほじくられ…ていますッ!?! あ、アタシ…いいいッ??!」

ブチュブチュブリュチュチュウウッ!!!

「フウロちゃん!!!」

ドビチュッ! ブチュルルルッブッ!!!

「もう、逃れられないの。(はあはあ…この、種付けを受けちゃうと…ここから脱する事ができても、墮ろせないから…」

トウコは犠牲者が増えた事を悲しみ、表情に暗く影を落とす。

フウロにぶち込まれた種付けは、単なる射精ではない。

彼女の"卵巣"に直植えされるのだ。

受精によって最後の分裂を行い卵子となり、そして精子の核が融合し受精卵へとなる、

その前段階ともいべき2次卵母細胞の状態で蓄えられていたものすべてが、一瞬で受精した。

フウロはこの瞬間、何十という触手達の母となる事を余儀なくされたのだ。

「そんな…なんてことをっ! …うっ、あああ…わ、わたしにまでっ、あっあっ、その輝きはいらな…あああーッ!!!」

Nがどんな思い至ってこのポケモンを増やそうとしているのか?

だが、もはや3人にはそれを知る意味もなければ知る事もできない。

この先ずっと、己の卵子の全てを受精しては、プリプリ触手をマンコからひり出して産み続けるだけなのだから…



「ううん…ハッ!? あれ、ここは…ドコ?」

メイはあたりを見回す。ポケモン研究所のような雰囲気だが、何か違和感を感じる場所だった。

「! あれ、ない…ないっ、私のモンスターボールが!」

他の荷物ものきなみ消えている。持ち物らしい持ち物が一切消えうせていた。

「お目覚めかね。いや、まあわかっていて聞くのは意味がないかな…フフフ」

「誰! ってあれ博士? いったいここは——んうっ!!」

急に全身が痺れたような気がして、彼女は口をつむぐ。

全身がビリビリッと、10万ボルトをくらったポケモンの放電の残り香をイメージの感覚が残った。

「ふむ、やはり改良型は効果はばつぐんだね。いい反応じゃあないか?」

「2年で随分と進化できたものですね、いやはや比べてみるところも違うとは」

もう一人、奥から人影があらわれる。いや、一人ではなかった。

誰かを伴いながら、博士と同じ白衣の男が姿をあらわす。

「え…だ、誰? はあはあ、んんっ…それに、これは一体????」

「紹介しよう。こっちの娘はトウコ、君と同じ"元"ポケモントレーナーだよ」

内股で前かがみになりながらフラフラと歩く女の子は、メイに気づくと慌てたように口を開く。

「は、早くにげてっ!! あなたも——ふあああうっ!!」

「残念だがね、彼女ももう"ゲット済み"だから、無駄だよトウコ君、ハハハ」

博士が持つボールが妖しく光ると、トウコと呼ばれた彼女はガクガクと震えて崩れ落ちた。

そして床に透明な液体が広がる。

「おやおや、締まりの悪い。さすがに2年もやりまくられては、ユルユルのガバガバになってしまったのかな?」

「い、一体どういうことですか?? 何がどうなって…は、博士は…あつ!」

ふと見た彼の表情が、何度も遭遇したプラズマ団の悪相に重なって見える。

まさか——

「フフフ、ご苦労だったメイ君。集め育てた君の強いポケモンは、未来のポケモン研究に活かされるじやろう」

「そんなん!! 私のポケモン、一体どうす…んうううっ!?! あっ、あっ、へっ…ひはああ!!」

カラダの奥から、むずかゆくももどかしい強い衝動が沸き起こり、メイはその場でのたうちまわった。

その間に、博士たちは不敵な笑みを浮かべつつ、自分の股間からイチモツを取り出し、準備する。

「そして君たちは、優秀なトレーナーじゃ。これから課せられる使命は他ならぬ優秀な子を残すこと!」

「!!? い、いやあつ、やめて博士っ!! あっあつ、だ、だあめえ〜〜〜つつつ」

メイは、スパッツをおろそうとする博士の腕をおさえて懸命に抗った。

だがその抵抗さえも楽しんでいるかのように、彼は口元を吊り上げて邪悪な笑みを浮かべる。

「おやおや、元気なことだのう。まるで2年前の君を見ているようじゃあないか、なあトウコ君?」

「…………うう、どうして。どうしてこんな事を…博士ッ」

最初からそのつもりだった。それがゆえに多くの将来有望な若きトレーナーたちを支援してきた。

ポケモン研究にくわえて、その研究を加速させるためのトレーナーをより優秀で数多く。

最初は善の研究者達も、行き過ぎた思想はいつの頃よりか悪へと反転し、それでもなお自分の考えを改めなかった。

「はあうう!! あんっ、あっ、んっ、はあつ、うう…あつ、ああ!!」

「ははは、ほらよく見ておきなさいメイ君。先輩がお手本を見せてくれているよ」

歪んだ博士は、トウコを“いつものように”犯しはじめる。

すっかりなじんだ肉穴は、彼のチンポに奉仕するように吸い付き、当たり前のように腰を振らせる。

「ひっ…あ、あんなの無理、無理ですから!! そんな、博士…博士? 博士ッ…い、いや———!!!!」

そして嫌がるメイにも、容赦なくチンポがねじこまれていく。

硬くほぐれていない肉の割れ目は、なかなか男根を迎え入れなかったが、

博士がボールを輝かせると、メイのうめき声と共に一気に埋もれていった。

「んううううっ!!!!? ま、まっ…たっ、ああつ!! はあ、ひっ、あひっ、う…へひいっ!!!!」

性感帯を狙うかのようなダイレクトな謎の刺激にさらされ、強制的な快楽を与えられる。

たとえばじめてであろうとも、マンコはペニスに熟達した締まりを与えうごめき、メイはよだれをたらして喘ぐ。

「はびいっ、あつ、あつ、んんっ!! は—は—、ぶぐううっ、んんっ、う—っつ?!!!!」

「ハハハハ、いい声でなきよる! いいぞお、実によい。"こちら"もなかなか有望じやのうっ」

年甲斐もなく腰を叩きつける博士は、とても満足げだ。

そそり勃ったモノは慣れてないはずの腔をスムーズに出入りし、その金玉の中では順調に種の準備が整えられている。

「なにせ儂も年じゃからのう。しっかりと種がつくよう、ここ1ヶ月ほど溜めに溜めておいたんじやぞ」

「あー、わかりますぞ。儂もこの2年で、トウコ君に種付けしまくったものの、なんとか1人産ませたといったところで」

トウコとメイがいかに若くとも、博士2人はいい年だ。

どんなに励んでも、うまく受精できる元気な精子は減少しているのは間違いない。

「うう…そ、そんなん、はあはあ、は、博士…そんな、ダメだよっ、あつ、ああつ!!」

「ひひ、心配せんでもいいぞメイ君! 今、人工の受精率100%の儂の精子を生成するマシンを作っておるでな!!」

強制懐妊、彼女の遺伝子を受けついだトレーナー候補の安定した産出…

もはや狂っているとしか言いようがない。

「いやあ———!! 誰か、誰かっ、あつあつ、なんとかして、ああつ、やめて、ダメダメええ!!!!!!!」

ビュウウツ! ビュウツツ!! ドビュツビュドビュグビュドツ!!!!

栄光で冒険の幕をおろした後、絶望の半生がはじまる…

二人は博士達に毎日種付けされる日々を過ごす。

しかしやがて種付け行為すら面倒になり、効率化を求めた博士二人によって、

常時精子を注入するマシンを取り付けられ、研究所にて飼われ続けた。

10数年後、孤児ながらやたら優秀なトレーナーが世界各地で次々と出没するようになる。

栄光の世代——ポケモンの黄金期を支えたトレーナーの時代がはじまる。

暗く恐ろしい真実がその裏にある事を、人々の誰も知らぬままに…



「え、マジ？ シラなかったんすか、ホミカさん？」

軽く小バカにしたような口調で、男は大きさに驚いてみせた。

「し、知らなかったわけじゃねーし。あたしはそーゆーの興味なかっただけだよ」

だが内心では…

「（やっペー。そうだったのか、あたしもしかして乗り遅れてた！？）」

焦りが募る。仮にもジムリーダーという立場なのだから、知らなかったという事に恥ずかしさが込み上げる。

半ばムキになって返す彼女の態度に、男たちは軽くほくそ笑んでいた。

「へへ、やっぱホミカさん、胸小さいッスね」

「う、うるさいうるさい！ あたしはそんな…で、デカイ胸なんていらねーッ！」

当然それは嘘に決まっている。

まだ前途がある、希望があるとはいえ胸の発育には多少なりとも気がかりだ。

「まあそう言わずに、俺らが大きくしてあげるッスよ」

「んうう！！ そ、そんなの嘘だろ、揉んで大きくなるとか迷信…はうっ！！」

脂肪が少ない分、彼らの手が与える衝撃は乳房内を走る神経により作用しやすい。

胸の奥底からピリッとくるものがある、つつい口をついでよからぬ声がもれ出てしまう。

「へー、そんな声も出るんすか。カワイッスねホミカさん」

「んなっ！ …か、かわいとかっ。はぁはぁ、んううっ！！ そ、そんな…こと…」

つい乙女な側面が出てしまい、彼女はモジモジしてしまった。

ムニムニと揉み回される胸からも気がそれて、意識に大きな隙が生まれたそのとき。

「ふはっ!? あひっ、ひゃ…うへうんううっ!!!?? ど、どこ触って…んひっ、おほっ、へううっ!!!」

グッチュグッチャッスツチョスツチュッ！！

股間の穴が、大音量ボリュームで聞こえるレベルの淫音を鳴らしてかきまわされる。

喘ぎ声は次第に短く小さくなり、無音の息すらも吐き出せなくなって、やがて…

「んうっ、ん…う…~~~~~~~~ツツツツ！！！！」

腹を天へ昇らせんとするように突き出し、弓なりにカラダを折れ曲がらせながら、彼女は小刻みに震えた。

「お…へ…、ふ…あ、あつ、う…あ…? …な、なんだ…コレ…え…??? ひ、は…へ、…あへ…え…」

初めての絶頂は、フルコーラスで持ち歌全曲をライブ披露した後よりもトンでもない気持ちよさがあった。

むしろ、それが気持ちいいのかどうかすら理解に苦しむ領域に達しているとさえ感じられ、頭の中は真っ白になる。

「感度いいッスねーホミカさん。こりゃあアッチのほうはなかなか期待できそうッス♪」

目が泳いで焦点がブレ、視界が定まらぬ中、男たちが自分の股間のモノを取り出しているのはなんとなくわかった。

だが、それを受けて反応する体力も気力もなく、彼女はただ挿入される時まで己の心をフワつかせて痙攣し続ける。

「おふっ、おうんっ、おっ、あっ、ふぁっ、んおっ、んあぁあつん！！！！」

インサートからのピストン運動は思いのほかスムーズだった。

激しいリズムでピートを刻むのに数分とかからない。

「いいッスね、マンコも乗ってきたッスよ！」

狭くて未開な肉穴は、挿入時こそ難を極めたが、一度ぶち貫いた後は驚異的なスピードでチンポになじんだ。

あるいは音楽ライブのリズムがその身にしみこんでいたのか、彼女の曲にあわせた出し入れにマンコは悦ぶ。

「んうおあぁっ！！ はぁ、はぁ、ぐうううっ、こ、これが…っ、あんっ、あうっ、はぁっ、せ…クスかぁっ！！」

流行りだとはだましてまで犯すことに成功した男たちの目論見に、これっぽちも気づかずに股を開く。

こうもあっさりとは思っていなかったが、いざ合体してみるともっと早くに手を出してもよかったとも思う。

男にそう思わせるほど、彼女が与えてくれる肉欲は評価に値した。

「はぁっ、ひいっ、あ、あんま、激しく飛ばしすぎっつと、ぜーぜー、も、もたないって…」

「大丈夫ッスよ。10人はいるし、1発2発じゃ萎えねーッスよ！」

「あ、あんたらじゃなくて、あたしがもたねーって言うてんの！！」

ただでさえイカされて、頭が真っ白になったまま犯されたのだ。

今、ホミカの脳内は急激に快感・愛欲・性欲に侵食されている。

「んぐう！ へっ、うっ、んっううう…あひっ、ひっ、んおあぁぁ！！」

はじけ飛んだ後の空白に、チンポの存在感のみが加わる。

それは肉欲への誘いであり、同時に他の一切を排除する専有状態の形成でもあった。

「はぐっっ、ほぐっ…ぶっ、ぶっ飛んじまうっ！！ はひー、はひーっ、あっあっあっ、んーっ！！」

小さいマンコで男根を120%堪能し、その先へとハマっていくホミカは、にわかに肩をひそめて恐怖の色を見せる。

しかしそれを上回る悦楽が、口元をだらしなく笑いひらかせ、瞳をトロけさせてゆく。

「いい顔ッスね！ でもこれから“毒”をぶち込むッスよ、そんな調子で耐えられるッスかー？」

「ど、毒…？ はーはー、あたしに毒とか笑わせるしー。んあっ、あっ！ そんなのなんてことないってえっ」

彼らの表現する“毒”が毒ではない事を彼女は知らない。

単なる比喩表現すらその意味を察する事もできないほど、頭は回っていないかった。

「はぁ、へえっ、んん！ ど、ーんっ、はーはー、きなっ。ぶっ飛ばで、爆散してやつからっ！！」

「じゃあお言葉に甘えていくッス！ どうなっても知らないッスよっ！！」

毒と聞いて余裕をかますホミカに、男は思いっきり己の精を込めて肉棒の我慢をほどいた——

ズビ…ッ！ ドビルルツルルルルッ！！ ビュググンツズギユギユンツッ！！

「んひいいいっ！！? んほぁっ、んあ…ふおおあぁあっ！！!? こ、この毒…や、ヤバひいいいッ♪?♪!」

驚愕と悦楽の感情が混ざり合って吹き飛び、全てが消えた。

瞳はぐるんと上を向き、唾液が分泌をおさえられずに口からこぼれ、子宮はバカみたいに白濁液をぎゅぽぎゅぽ吸い続ける。

ホミカの頭の中はチンポミルクで満たされ、ぎゅうぎゅうに詰まった精子が泳ぎまわっているかのような感覚を覚えるのだった。

「はっ、はっ、あんっ、あうっ、はあんっ！！ やっぱ、ライブの前と後はっ、んっ、んうっ、セックスだしっ」

すっかり色狂った彼女は、ライブ仲間だろうとライブ客だろうとポケモン勝負の相手だろうと構わずやりまくっていた。

「んいっ、ひはあぁぁ！！ はっ、はぁ…今度、ドガスともハマてみっかな？」

考えてみればポケモンとて繁殖するのだから、オスにはチンポが付いているはず…

そんな考えまで抱くようになった彼女だが、

本物の毒があるからそれだけはやめておけと周囲の連中が止めに入り、実現はならなかった。



「うう、負けちゃったあたしたち。勝てなくてくやしいよ！」

チャンピオンとて、公式戦で挑戦者を待ち受けるばかりではない。
当然、私として非公式戦を行う事がある。
むしろチャンピオンになるほどの者が、年に何回あるかどうかの試合で満足できるわけもない。

「フフフ、まだですよこれで終わりではありません」

「え？」
だが、今回は対戦相手が悪かった。
最初から勝ち負けなどどうでもいい…勝っても負けても、彼らの目的はたった一つだった。

「きゃあ！！？ な、なにをするの。あ、あたしのモンスターボールっ、返せっ！！」

服をひんむかれて最近成長著しい乳房が、褐色の肌の煌めきと共にあふれ出る。
しかし、自身の羞恥心よりも仲間であり友であるポケモンの方が大事だ。
アイリスは恥部を隠す事なく飛び掛った。

「おい、お前達。油断はするなよ？」

「はっ、わかっております」

「ううーっ、返せ！ あたしのボールっ、あっ！！」

びよんびよん跳ねる彼女の胸元で、乳房がブルンブルン揺らめく。
大きく上へと掲げられたモンスターボールはどんなに飛びつこうにも届かない。
意識が上へと向いてしまっていた彼女の隙だらけの下半身は、軽く引かれるだけで尻餅について落ちた。

「きゃんっ！！ あいたたた…え？ な、何これ」

彼女が馬乗りになった股のすぐ手前に、雄雄しく伸びたイチモツがその存在感を誇示している。
「おおっと、惜しい。もう少しでわたくしのモノが直接入るところだったものを」

「！！ や、やだっ、これって…あうあうっ…うっ！？ は、はなせっ」

彼の部下らしき男たちは、アイリスの両脇を抱える。
そしてそのままカラダを15センチほど持ち上げたかと思うと――

「え…あ、やめてっ、やだ！ そんなの、ダメダメダメっ、やめてったら…あっひ！！！！？」

ほんの僅かにアソコに龟头が入ったところで、男たちは彼女の両肩を押し込む。
下からも、腰を掴まれ引く張る男に、アイリスは踏ん張って抵抗するも、3人の力には抗しきれず…

「ふんあああう！！！！ い、いぎ…ひ、…う、嘘だよ、こんなの…あ、あ…」

「ほほう、ぶち込む瞬間の眺めは予想以上によかったな。これは思わぬ収穫か、おい！」
「はっ」

多くを言わずとも、彼の部下はその意図を汲み取る。
アイリスの脇に手を通して再び掴みなおしたかと思うと、そのカラダを持ち上げていく。

「ううう…な、なに。はあ、はあ、今度は何する気っ!？」

男のペニスもう少しで抜けるというところまで持ち上がった彼女のカラダを、
部下達は互いに見合っ顔きあい、呼吸を合わせて――掴んでいた腕を離れた。

ズボボボボッ！ スドムウッ！！

「ふんんううううう！！！！？ …あ、ひは…、ん…あ、…ぎ…い…、い…」

タブン、プルン…プルッ、ブル…フユン…

自重による落下で、マンコの入り口から一気に深部まで貫いたペニスは、
そのままアイリスの子宮へとまかり通った。
2度目の激しいぶち込みで、彼女の胸は揺れ動く。

「うむ、よいぞよいぞ。なかなかのものではないか」

決して巨乳とはいえないが、将来性を秘めた有望株は確かなボリュームをその揺れ動きで魅せてくれる。
男は悶絶する彼女の胎内でムスコをあたためながら、眼前に迫っては弾んで遠のく下乳に見入っていた。

「はあはあ、はあ、はあ…うう、あ、あたしの…あたしの、ボール…うう…」

「ほう、このような目にあっても、自分よりボールが大事か？」

乙女の大事なものを奪われた事よりも、大事な友達を奪われる事のほうが嫌だ。
彼女は力を振り絞って、懸命に立ち上がろうとする。
だが、チンポを4、5センチほど抜き上がったところで、彼の部下に再び押し込まれ――

「ひぐうう！！ はーはー、かえ…せ、あたしの…ポケモンッ」

根元までねじこまれても、なおその手を伸ばす。
汗がポタポタ滴り落ちて、褐色肌が艶やかに照り返した。

「フン、下らん。そんなに“道具”が大事か、理解できないぬわたくしにはッ！！」

「はうっ！！ あっ、ぐっ、うんっ、はあはあ、んなっ、うっ！ ど、道具じゃ…ない、もんっ！！」

だが、再び手を伸ばした先にはボールの姿はなく、かわりに部下たちのペニスがアイリスを待ち構えていた。

「な、あ、あたしのボールはっ！！？ うう、や、いやっ、こんなの触りたくないっ！！」

拒否するアイリスに無理矢理自分の男根を挿ませる部下達。
その間にも、下から突き上げるチンポに全身は揺さぶられ続ける。

「ククク、そんなに大事なら逆らわないことだなチャンピオン？ まあ、どうなってもいいと言うのなら…」
彼の言葉にあわせて、部下達はアイリスのボールを高く掲げる。
そしてチラリと見た先には、使用期限の過ぎた“古い空のボールを処分するための”箱があった。

「！！ や、やめてっ！！ そんなことしたらっ！！」

「ハハハ、そうらそらっ、ボールが大事ならばわたくしに従いなさい、チャンピオン！！ ハハハハッ！！」
愉快きまりないと、ご満悦に腰を振るう男は、そのまま彼女の胎内を龟头でグリグリねぶった。
揺れ動くオッパイを目で楽しみ、そして股間を昂ぶらせる！！

「やめてえっ、あたしの、あたしのポケモンッ、いや、やあだあー！！！！」

ビュグルルウッ！！ ビュビュッ！ グブグブドルッ！！

胎内へのダイレクト射精にも構わず、ボールを優先する彼女。
その後男は、彼女のモンスターボールを人質に、徹底的にやりまくった。

――そして

「またまた、また！ 勝利はチャンピオン、アイリスーーーー！！！！」

「いやあ、彼女は強いですねえ。しかし、以前は主力をドラゴンタイプで固めてたのですが…」

「そうですねえ。ですがいろんなタイプのポケモンを駆使していますよね、今は、こだわりを捨てたのでしょうかね？」
大歓声と実況の声でどれだけ盛り上がるうとも、彼女の耳には届かない。
勝負が終わるやいなや、アイリスはすぐにひっこんでしまった。

「フッフッフ、さすがはチャンピオンだ。いや、この調子で勝ち続けてもらわないとな、フフフ…」

男は控え室に戻ったばかりの彼女のカラダに、すぐさまからみついてその股間や胸元をまさぐる。
アイリスは抵抗しない。

「…いいから、さっさとすればいいじゃない。いつもみたいに」

試合後は控え室で一発、そのままホテルへ直行し3日3晩やりまくる。
その翌日はプラズマ団の新入りの忠誠とやる気を盛りたてるために大乱交、
そしてまた彼に抱かれるのを次の試合の日まで繰り返す。
逆らえない――大事なポケモンを奪われてから。

ずっとずっと犯され続け、やがてはプラズマ団の傀儡となるのだろう…それでもアイリスは諦めてはいない。
種が付こうが、お腹が膨らみだそうが、母乳が出始めようが、必ず取り返すと己の意志を強く持ち続けていた。



「他のジムに来るのは久しぶりです。さあ、アタシと楽しいことしましょう！」

やる気まんまんのフウロの言葉に、シズイが驚きの表情を浮かべた。

「た、楽しいこと…じゃと!? そ、それはあれか、おはんとおいで…」

「そうです、二人で楽しいことといたら決まっているじゃありませんか」

なぜかノリがあわないシズイの様子に、フウロは怪訝そうに首をひねる。

それもそのはず、二人が考えている"楽しいこと"には、天と地ほどの差があった。

「じゃ、じゃあお言葉にあまえるとするがじゃ！ いくじゃでえっ！」

「え？ ひやあっ！！ な、なに、なにをなさる気なのですかっ！！？」

ドバチンッ！！

まるでプールに飛び込むがごとく飛び掛ってきたシズイに、彼女は思わず平手打ちをくらわす。

頬を狙ったそれは角度が悪く、彼の胸板の下を綺麗に叩いた。

「おおおお！！ は、腹ドボンするより強烈じゃに…、そ、そーゆープレイたい？ なら…おはんら！」

ジムリーダーの呼びかけで、一気に人が集まってくる。

あっという間にフウロを取り囲んだかと思うと、そのカラダを捕らえておさえつけた。

「ええええ、一体どういうつもりで——きゃああああああ、エッチ、ヘンタイ——っ！！！」

「おっと、もうおはんの攻撃は封じちよる。暴れてもむだじゃが、おとなしゅう脱ぎ脱ぎするんじゃよ！」

ワキワキと両手の指をうごめかし、彼女の衣服を剥ぎにかかる。

だが、仮にもフウロとてジムリーダーの一人だ。いかに抑え付けられていようと、簡単に脱がさせはしない。

パキッ！

「ほぐっ！な、なんのこげなくらい」

「いやーっ！」

ズガッ！！

「ぬっほお！！？ じゃ、じゃがおいはまだまだ——」

ドベキッ！

「——へブッ。ふ…や、やりおる…じゃどもっ、せめて、せめて拜むモン拜ませりいっ！！」

強烈な抵抗を受けようとも、シズイは倒れるフリをして彼女の股間部に手をかけた。

そのまま倒れる力を利用して引きちぎる！

「あ——！！ アタシのお気に入りの…っな、なんてことなさるんですかっ！！？」

マンコは丸見え、胸元は大きくひらき、ジムの人々によって驚づかみにされている。

だがそれよりもお気に入りのパンツを失った事のほうが、彼女にとってはショックだった。

「へ、へへ…おいはやった、やってやったばい！ さー、楽しいことするんじゃあ♪」

「やっ、あ…！ た、楽しいことってそういうのではっ、…ううんっ！」

モミュモミュと乳肉がほぐされると、不思議と余計な力が抜けてカラダがリラックス状態に近づく。

その後に、ソクソクとした小さな波が走り、

最初はこそばゆく落ち着かない感覚が生じて、そしてやがて快感へと変わる人体の神秘の変化を経験する。

「ううんっ、や…め…、あひっ！！？ な、なんてところに…そ、そのようなモノをっ」

メリメリと肉をかきわけて、ペニスが尻穴に埋もれようとしてくる。

排出の逆をうけて、びっくりした直腸がうねうねとごめき、再排出を試みるもうまくいわずに困惑した。

「それだけでは終わらんたいよ！ こっちはおいがいくばいねっ！！」

「や、やめてください！ アタシそんな事をしにきたわけじゃ——あああっ！？！！」

デカイ、太い、熱い…

様々な情報が一気になだれこんできて、苦痛と快楽が後回しになる。

膣そのものは、入り口付近でしか異物を感じる事はできない。

しかし、膣壁ごと押された子宮や臓器などの他の肉を通る神経が、膣の感覚器官として作用する。

「んっ、うっ！！ あうっ、やっ、ふんうううっ！！」

アナルとマンコの2本挿しは、

成功すればまさに、膣がインサートからのチンポピストンを最大限に感じられる行為だった。

「おおお！？ す、すごがばいこの締まりっ！ たまらんのじゃっ！」

「はぐうっ、や、やめてくださいっ。う、動かないで…え、えぐれてしまいますっ！！！」

異物が中で暴れる——それはまさにわが身を内からかき回されるが如くだろう。

男には決して感じえない感覚だが、女として感じる事が可能であるというだけで、その感覚に覚えがあるわけもない。

「ううっ！ んっ、んっ、はあううっ！！ あんっ、ああ…こ、声が、ヘン…にっ、なっしてしま…ううんうっ！」

頭で否定してもカラダへの交尾は現実だ。

チンポをぶち込まれれば、自然とそうなるようにできているもの…

「あんっあんっ、だ、ダメ…ですっ！ はああ、こ、こんな声は…だし、だしたく…ないっ、のにっ！」

「おはん、最高じゃ！ 何もかもたまらんばい、今日は徹底的にやりまくってやるけん！！」

喘ぎ声は耳に心地よく、アソコの具合も最高。

目の前で揺らめくオツパイ肉は、眼福にして掴んでもなおその感触に感動を覚える。

シズイの腰が激しくなるのも当然というもの。ましてやこれほどの相手ならば、ためらう必要もなく…

「はあうっ、あんっ、やっ、あっ！ あっ、と、飛ぶっ!? カラダがっ、飛んで…しまいそうううっ！！！」

ビュルルルルビュチュビュチュッ！！！ ビュルンツビュチャッ！ ビュックビュクウッ！！

フウロのカラダは文字通り飛んで、中出しの最中にすっぽ抜ける。

だが、彼のチンポとマンコの間にはザーメンの糸がつながり、

それをガイドに、残りの射精物がマンコ口まで綺麗に飛んでいった。

「おいはまだまだ元気じゃき！ 覚悟するばい！！」

「えーん！！ なんて、どうしたらこうなるのですかあっ！！！」

「…うん、よかばい。すごくよかっ！！ さあやろう、楽しいことば——…あ！？」

ザシュザシュザシュッ！！

フウロのポケモンが放ったエアカッターが、シズイを滅多切りにする！！

「な、なんじゃと——！！？」

「ああ、だから早くポケモンをださないと、ってずっと言っていましたのに…」

自分のポケモンも出さずになぜかシズイはポーっとしていた。

フウロはなんともスッキリしない気分ではあったが、肝心のジムリーダーであるシズイは戦闘不能に陥り、

不完全燃焼な気分のまま、自分のジムへと帰っていった。

「ど、どこからおいの妄想だったんじゃ…いったい？？？」

フウロの繰り出したポケモンの先制攻撃でメロメロになった事が原因とようやく判明したのは

病院にて見舞いに来たジムの仲間に戦闘の顛末を教えてもらってからだった。



「所詮はトレーナー、資質はあってもそれが開花するかは別…ということですか」
バトル直後にも関わらず、アクロマはなにやらレポートを取りまとめている。
その研究には善も悪もはらんでいない。しかし限りなく欲深く、際限なき探究心だけが宿っていた。
「なんて…なんて人なの。バトルでもこんなに強いなんて…」
「それこそ、わたくしの研究の成果なのですよ。しかし、今のバトルではっきり致しましたッ」
「？」
メガネのズレをなおし、彼はメイに近づく。
「以前より薄々感じていたわたくしの研究そのものに対する違和感…」
そう、ポケモンの強さを際限なく引き出すには、ポケモンのみを研究していても限界があるということを！」

プシュー！ パフフッ！！
「！？ げほっ、ごほっ…け、わり………っう」
アクロマの高らかな宣言にも似た叫びと共に、メイを薄ピンク色の煙が包む。
その場に両膝から崩れ、かろうじて両手をついて四つん這いで倒れとどまるも、
全身の筋肉は緩んで力が入らない。
「すぐれたポケモントレーナー、その資質と力を引き出す事、それが必要不可欠ッ！」
「一体…なに、を…する気…なの…？」
カラダを抱き起こされ、そのまま運ばれてもなんの抵抗もできない。
バッグが外れてモンスターボールが床に散らばるも、届かない手を伸ばすばかり。
そのまま研究室の一室へと連れ込まれた途端、メイのカラダはまさぐられはじめた。
「んっ…うっ、あ…く、くすぐ…たい…よお…」
「なるほどなるほどッ、よい感度です！ さすがと言っておきましょう、ますます期待が持てそうですヨ」
スパッツの上から股間の割れ目をこじあげ、閉じている穴のまわりの肉をほぐさんと指でなぞる。
アクロマの手つきは愛撫というよりも、実験でもしているかのようなだった。
「はっ…あぁあ、ううん…っ、な…なんで…こんな、事…はぁはぁ」
服も取られ、下着は投げ捨てられ、胸があらわになって隠そうと力をこめた腕は僅かも持ち上がらない。
下からすくい、中央に寄せて上へと回し上げ、外側へと落として円を描く両乳房の様子を、
彼女は見ているしかなく、神経を走る刺激によって自分の乳頭がどンドン膨らんでいく様を観察する。
「ううっ…、はぁあ、う…な、あ、は…ううん…わ、私を…どうする…の…」
「優秀なるものはその優秀さを後世へと伝えてしかるべきですからね。で、あれば、やる事は一つッ！」
アクロマは、他の研究者らしき男たちに合図を送る。
すると彼らは手にしていたレポートなりペンなり、電子機器なりを手近な机に置くと、社会の窓をあけた。

「！！ ま、まさ…か…あッ！！ や、やめて…そんなあぶな…っ、い…！」
一人がハサミをもってメイのスパッツの股間部を切り裂く。
黒い色の中に明るい肌色に包まれたピンクの花が咲き、その配色から男たちに乙女の園をより強調されて現る。
「大事な研究対象を傷つけよう者はおりません、それに彼らはオマケです、ご安心をッ」
すると、プラズマ団の団員らしき男が新たに入室してくる。
しかも入ってくるやいなや、自分の股間のモノを取り出した。
「あなたの"パートナー"は彼らです。遺伝子上においても、その活動においても優れた厳選された種元ですッ！」
「…ッ！ そ、そんな…う、い、イヤ…そ、そういう事は…はぁはぁ、す、好きな人と…あッ！！」
ズムズムグググ…ズムンッ！
なんの躊躇いもなく、早々に挿し込まれたチンポは、力の入らぬカラダを楽々と貫き終えた。
腔壁から、接触する肉棒の表面から男の血の脈動を感じ、確かな異性と合体のはずがどこか現実離れしているように思える。
「薬が効いていますでしょう。痛みはないハズですッ。しかし…そのためにあなたのカラダに弛緩したわけではありませんッ」
そういうと、アクロマは自分のチンポをメイの尻穴にあてがった。
「あう…そ、そんな。はぁはぁ、んんううううっ!? あ、あっ、あっう!?」
お尻にまで男根が挿入されてくる——最初、とんでもない苦痛が発生するものだと思い、彼女は唸った。
ところが、まるで苦痛を感じない。マンコと違い、ペニスの大きさを啜るには不十分な穴のはずなのに。
「優秀で資質あるトレーナー…それをただの苗床にするなど、そんなもったいない事、わたくしはいたしませんよッ」
するとアクロマは部下になにやら指示を出す。
専門用語が多く混じった指令ではあったが、どうやら記録をとるような事を短く話し合っていた。

「んっ、はぁ…はぁ、うう…こ、これって…あっ、う！」
挿入だけで終わるはずはなく、そうこうしている間も、2本のチンポはメイの下腹部をえぐりうごめいている。
だが無理矢理に穴をこじあけるような荒々しい行為でも、性感帯を刺激する事による快感しか感じられない。
「わたくしが導き出した結論。それは様々において愛が信じられない力を呼び覚ますという事ッ！」
たしかにポケモンに対する愛情が深いトレーナーは、自分のポケモンの力を引き出す事はあるかもしれない。
それに限らず、さまざまな人や状況など、多くにおいて潜在的な力を発揮する原因に愛があがる事例は存在した。
「はぁあぁあッ！！ む、無理矢理…こんな事、され…てっ、あ、愛も何も…ッ」
「当然ですッ！ わたくしに対して憎しみを感じこそするでしょうッ！ しかし故意に愛を引き出す方法があるとすれば？」
そんな事は不可能だ、とメイは思った。感情や心は理屈や技術でどうにかなるものではない。
カラダがどんな薬を使われ、快楽を与えられて気持ちよくなるうともそれで相手を好きになるなんて事はない。
「はぁ、あぁあう！ うう…ふ、深っ…く…、あ、あ、んんうう！！」
たしかに気持ちいい。はじめてのはずなのにものすごくチンポにズコバコされるのがたまらない。
だがそれは肉欲を満たすものでしかなく、心に動きかけたとしても、性行為が好きになるだけで、相手を好きになるのとは別のはず…
強い快感と、好ましく思えるセックスへの目覚めの中、それでもメイは相手の男を愛するなどありえないと思っていた。
「そのうちわかるでショウ！ そしてッ、これによってアナタ自身もさらに強くなるのですッ！！！」
「ううんっ！ はぁはぁ、そんなこと…ありえな、あぁあ、はぁあうっ、ああんっ、き、気持ちいいっけ
どおっ！！！」
ビュグルンッ！！ ドクドクドクンッ！！ トクットクンッ！！

お酒でも注がれる時の音がなっているような、子宮へのザーメンの注がれ様。
子宮口前でたまりにたまった精子たちが、順番にメイの胎内へと綺麗に入っていく、彼女の腹を満たす。
奥深くでポコンと排卵されたばかりの卵子が、何も知らずにフラフラと旅立ち、やがて彼らに出会うだろう。
己の中の肉眼で捉えられぬ神秘の世界が大きく動きはじめても、メイはそれを知ることなく下腹部の痙攣にどこか爽やかな気分を感じていた。

——1年後
「ほお、また勝ちましたかッ！ いいですね、実にすばらしいッ」
アクロマは報告を聞いて、喜々として立ち上がった。
「彼女に伝えなさい。帰ってきたら子供に顔を見せてあげるように、と」
メイは自分を孕ませた男も、当然それを主導したアクロマも憎んでいる。
だが、自分のお腹を痛めて産んだ我が子への愛が、今の彼女の力の原動力となっていた。
「それと、“この子達にも”たまには会いに来るようにとも伝えるのです」
彼がゆっくりと歩を進める側には、たくさんの培養カプセルが並んでいる。
その中には、多くの子供が育ちつつあった。
アクロマは、最初の一人こそメイに直接産ませたが、その後は受精した側から彼女の胎内より取り出し、
人工子宮であるカプセルにうつしていた。わずかな時間で大量に彼女の子を残し、しかも彼女のカラダに負担はない。
次々と男とやらせては受精させまくる体制がすっかり整っていた。
「わずか1年で、彼女は"30児の母"ですからねッ、今後も"よろしく頼みます"とくれぐれも丁寧に伝えるように」
もし、我が子一人ならば、メイは子供を連れてアクロマの元を逃げ出そうとした事だろう。
だが、お腹を痛めずとも確かに自分の子供がこども増えていけば…
母としての愛情を知った彼女に、もはやそれらを見捨てるなんて事はできず、
一生をアクロマの元で優秀な子供を受精して暮らしていくしか選択肢はなかった。



「カミツレちゃん…、ジョークでもダジャレでも、カミツレちゃんに似合わないと思うよ？」
「そんなことはない…ううん、ないと…思いたいだけ、なのかな…やっぱり」
フウロの指摘に、彼女の輝きは急激にしぼんでゆく。
友人ゆえにその発言には忌憚がなく、カミツレの心に響いた。
「じゃ、じゃあ！ 今度ね？ ステージでちょっと変わった事をする事になったの」
「？ 変わったこと？」
「うん、新しい私を開拓したいって言ったら、プロデューサーがね、任せておきなさいって…」
自分発ではなく、他人の目からみたイメージチェンジというアプローチ。
それを友人の目線で見てみてほしいとフウロは、当日関係者として入れるパスを手渡された。

「！？ え…な、何これっ…お、おかしくないですか！？」
パスを見せると、ステージ脇に通されたフウロは、思わず息をのんだ。
そこで行われていた事は——
「はぁはぁ、うう…ま、まだこんなにたくさんあるだなんて…んむ、むぐ…んん…」
淫行極まりないステージ。
男の股間に顔を埋める、モデルとはとても思えない不埒な友人の姿がそこにあった。
「ど、どういう事ですか！？ なぜカミツレちゃんがあのような事をっ！??」
どこかやせ細って元気のないスタッフは語る。
華やかに見えるモデルの世界だが、業界は日々運営資金に頭を悩ませる事務所ばかり。
ウチのように誰もが知るトップモデルを抱えていても、裏側は順調とはいえない。
「そんな、それじゃあこれって、噂に聞く枕営業とかそういう事…なんですか？」
彼はコクリと頷く。
もともとなかなか売れないモデルの仕事なのだが、
そういうモデルは往々にしてカラダを張ったところで出資者の評判はあがらない。
しかし、そこに今回名乗りをあげてくれたのが、他でもないカミツレだったというのだ。

「嘘！ カミツレちゃんはただのイメチェンのつもりで——あっ！？」
スタッフはそれ以上何も言わず、うつむいたままフウロをステージへと突き飛ばす。
彼女の身体はすぐにも裸体の男の背中にぶつかった。
「え、あ…ち、違いますアタシは——ぶぐう！！？」
気を利かせて女を追加してくれたと思ったのか、男はフウロを抱きしめるとその唇を奪う。
そしてそのまま自分のカラダで床に埋め込むように押し倒すと、
彼女の衣服を最小限破きながら、カラダの肉付きのいい部分をこねくり回していった…

「はぁ、はぁっ、はっ、はっ…こ、これがプロデューサーの言っていた…あ、新しい輝きつい！！」
ザーメンを飲まされまくったノドは、苦味とネバネバで嫌な苦しさが続いている。
だが、口をすすぐは水のかわりに男たちからキスで移される唾液だ。
胃は精液に満たされ、ノドは男くさい体液が入り乱れて混沌としていた。
「うう…カ、カミツレちゃん。違うよ、こんなの…はぁはぁ、い、イメチェンとかそういうのじゃ…っ」
フウロがやられている事は気づいていた。
けれど、共に同じことを同じ場所で行われる——それがあまりにも心強くて、カミツレは友人を退けさせなかった。
「大丈夫…たぶんっ、はぁはぁ…心配しないでフウロちゃん。"コレ"は、わたしがする…からっ！！」
腰を落とす、男の股間に向かって。
途端に襲い掛かる、カラダを上へと押し上げる感覚。
股間の肉を割いて押し入ってくる異物感。そして…異性の生殖器が子宮にまで到達したという実感。
「あっ、はぁ…んっ、う！！ あ、熱くて…や、焼けてしまいそうっ。ああ…今までのわたしが、違うなにかがっ」
全身を奮わせ、困惑に満ちた顔を浮かべる。
どんな感情をもって臨めばよいのかわからず、ただ知識のままに腰を浮かせては沈めてみた。
「〜〜〜ツツ！！?? あ、あ…な、なんて、スゴ、イ…っ、よははわからない。け、けれどもっ、ああっ！！」
不思議と腰が同じ動きを繰り返す。
自分の意思をかけはなれ、やめられない止まらないと勝手に動き出すカラダ。
内なる媚肉をペニスでこする新感覚は、本当に新たなナニかを彼女にもたらしてくれそうな気させ起こさせた。

「だ、ダメだったらカミツレちゃん！ だまされちゃ…はひゅうっ！！? あひっ、んん…あっ、ダメそんなに奥はっ」
友に呼びかけようにも、フウロの声は震えてしまう。
男の口が、自分のマンコをチュルチュルと吸うたびに、カラダの中から意志や自我が抜けていきそうだった。
「はあああっ、そ、そんなに吸われてはっ！ はああうんっ、あっ、ひ…力が…ぬ、抜けてしまいます…っ…」
目の前で揺れる、カミツレの豊かな乳房。二の腕に挟まれ、2つの乳山はぎゅっとより膨らみを強調しながら上下に振るえている。
さすがはモデルだ、その裸体は同性の自分ですらも見惚れるものがある。
スタイルでは負けてはいないものの、仮にまったく同じスリーサイズだったとしても根本的にモノが違う。
「んうっ、ひうっ！！ あっ、う…はぁ、はぁ、ぜえぜえ…か、カミツレ…ちゃん…っ」
男と股をつなぎあわせて腰を上下させる友人は、ますます女性的魅力に満ちていくようだった。
このまま、遠くへ行ってしまいそうな不安を覚えるほどに——

「カミツレちゃん、カミツレちゃあ————んツツ！！！」
ドククツ！！
「はあうっ！！? あっ、んんううっ、はぁっ、あっ? で、出て、いる…? わ、わたしの…中…へっ…」

ドクドクドクツ！！ ドクドクドクドクンツ！！
カミツレは困惑した表情で、視線を泳がせた。
対面するフウロの視界には、ハッキリと彼女の下腹部が盛り上がりは引っ込む動きを捉えている。
その許容量を越えて流れようとする水が、ホースの一部を押し広げながら通っていくように、
カミツレの胎内へと、男の種が注がれていく様がそこにあらわれていた…

「『ポケモン胎動』——あの超有名モデル、ついにポケモンを産む!? ポケモン×カミツレの超傑作! ——」
パッケージの写真を見る限り、モンスターボールをアソコに詰めてそれを排出する企画モノらしい。
「『カミツレ、ゲットだぜ』——有名トレーナーにゲットされてしまった彼女の運命はいかに! ——」
AV男優が扮する有名トレーナーサオシによる、ピカチュウコスプレのカミツレを犯している。
「『ライモンポケモンジムのトレーニング——一緒に夜のトレーニングしよっ——』」
カミツレが男優相手にステージ上で、丁寧にセックスのやり方を説明しながら実践している。
「…………。カミツレちゃん……」
フウロはあれから彼女に連絡を取れないでいた。
時間が経つにつれて、彼女が出演する妖しげな映像作品がその手のお店に並んでいく。
それを通して、少なくとも元気である事だけはフウロにも伝わっていた。
「!? 『新しい輝き』——ついに、カミツレ嬢好! トップモデルの妊婦シリーズ第一弾! ——」
そのパッケージを見たとき、彼女はヒザから崩れ落ちた。
もう…完全に届かないところにいってしまったのだと、
フウロは以後、カミツレ出演作をチェックする事もなくなった。



「はぁ、っはぁ…なんてこと、ここまで、だなんてね…うくうっ！」

正直、認識を改めずにはいられない。ナツメは苦笑しながらなめていた1時間前の自分を自嘲する。噂にはきいていた業界の裏——それをわが身で体感し、はじめて知った時にはもう引き返せない。

「あうっ、い…いやぁ…ひゃんっ、あっ、ううんっ！」

目の前でナツメが犯されている様子を見せられながら、次はお前がああなる番だと念入りな愛撫を受け続けるメイ。頭の奥底がポーっとして、思わず気が遠くなりそうになる。しかし——

「ふううっ、んんっ！ あひっ…や、め…、もう…やめ、てへえっ」

風呂でのぼせた後のような頭に、脳内で分泌される快樂物質が冷や水を浴びせかけて意識を引き戻すのだ。

もうとろけそうなカラダにも関わらず、なおも施される愛撫で、彼女の耐久力はバラバラに砕けきっていた。

「はぁ、はぁ…ふっ、う…く。カメラは…はぁはぁ、そっち…？ わかったわ…んうぁっ、あっ、くううっ！！」

ビュルウ！ ビュグビュグッ！！

ナツメはかすかにカラダを傾け、男の射精を膣で受け止めた。カメラに対してなるべく正対するアングルは、犯された肉体を魅せるための努力だ。

「はーはー、ふー…ふう〜…。ほら、そっちもがんばんなさいよ？ 今度こそ、失敗はできないんだから、ぜえぜえ」

本来ならばこんな屈辱、受け入れる事などありえない。だが、彼女らによる映画の興行収入は振るわずに大赤字となってしまった以上、その穴埋め策に文句は言えない。プライドはズタズタだが、ここで失敗を重ねれば、次はどんな事を強いられるかわかったものじゃなかった。

「あ、あつい…うう、か、カラダが…おかしくなっちゃ…って…っえっ」

メイはガクンガクンとカラダを揺らしている。イカされ過ぎて性感帯が暴走し、全身の神経が狂ってしまった。撮れ高をかせぐため、ナツメのインサートからのピストン行為を長時間撮っている間中、ずっと愛撫されつくしてきたメイは、完全に焼け付いている。

「泣き言は通用しないわよ。やることやれなかったんだから、覚悟することね…」

彼女とてこんな自分を安く売するようなマネなどまっぴらゴメンだ。しかし、どうしようもない。自分の股間の中のドロドロした感触に不快感をしめしながらも、彼女は再び股を開くしかなかった。

「あ、あう…や、やっぱり私にも…挿入れ、る…の？ あ、あっ、ちよ…ちょっと待って今こんな感じで入ってきたらッ！」

しかしカメラはすでに赤ランプが点灯している。男が腰をすすめてメイを犯しかかると、彼女の全身がドクンと跳ね上がった。

「あああああああああッ！！？ ひ、ひぐううぶううっ？！！」

挿入れただけで全身くまなく性感帯になったように感じまくるカラダ。まるで他の生物に乗り移ったかのように、自分の肉体の自由が効かない。

「はひうっ、や、やめ、てええええっ、お、おかしくなるおかしくなるっ、おかしくなっちゃううう！！」

異常な速さで言葉をまわし、腹部を中心にガクンガクン暴れ動くメイ。それは抵抗ではない——感じすぎて絶え間ない絶頂に犯されてしまった肢体の末路だ。

「んっ、んっ…ふうふう。やりすぎなんじゃない、壊れちゃいそうだけど…んっ、あんっ！」

二回目のインサートに入ったナツメも、さすがに横目でメイの様子を気にする。誰の目からみても異常なほどに感じまくってしまっているのだから、気にするなというほうが無理だ。しかし、現場監督らしき男はストップをかけずに、悠々と構えていた。

「はぁはぁ、そっちがいいなら、私たちにこれ以上とやかく言う事はできないけどき…んんっ、うつん！！」

実際のところ、ナツメとて他人を気にしてられるほど余裕があるわけではなかった。長い長いセックスを行われ、射精物を洗い流すこともなく連続でのセックス本番シーンである。体力は相当に消耗しているし、精神的にもキツイものがのしかかりつつあった。

「ううんっ、ふっ、くっ…あつん！ はぁ、ふう…んあっ、じょ、女優は…んんんっ、も、少し丁寧に扱い…なさい…っ」

だが、この"裏撮影"においては、女優の地位は最低といっても過言ではない。なにせこれはいわばペナルティも兼ねているからだ。売り上げの悪かったキャストはカラダで赤字を埋めろというポケウツドの間の規則である。

「あああああっ、ら、めええっ、こわれ、ちゃうっ、おかひくなっひやうううっ！！ あんっ、あんっあんっ！！」

狂ったように喘ぎ悶えるメイにも、場にいるスタッフたちはまるで動じない。彼女が壊れようが知ったことじゃないといわんばかりの態度だ。それもそのはず、こうして潰れていった赤字女優は過去に数多く見てきたゆえ、いまさら同情すらも沸いてはこない。

「へんになるへんになるへんになるふううっ！！ はへえっ、ひっ、あひっいっ、らめっらめらめええっ、も、もうやめへええ！！！」

喚き散らす彼女に、男はこん身の力で腰をぶち込んだ。その瞬間、子宮口が大きくひらいて、男のチンポをその中ほどまで飲み込み——

ビュドルルルルッ！！ ビュグンビュルロッ！ グボゴボドグボッボボオッ！！！！

「んひ———……………ツ、ツツ、ツツ…ツツ♪？♪？♪？？」

つま先がピキピキと硬直して、電流でも流し込まれるように間接がピクンピクン動く。ひとしきり暴れうごめいていたオッパイが、ようやく止まったかと思うと、

ブシャッ！ ブシー———ッ！！

母乳とは言いがたい、薄白色の乳汁がメイの両乳頭から噴出す。完全に乱れ狂わされた神経が、彼女のカラダのあちこちで誤作動を起こさせ、肉体は異常な活動を行っていた。

「は、へ……え、へあ…、ツ…ひ…は…、あ…へ、え…へへ…え♪ …ツ」

痙攣を続けながら、完全にイってしまっているメイの様子に恐怖を感じつつも、ナツメはしっかりと自我を保ちつつ、二度目の射精を受け止める。この際自分が切り抜けられればそれでよい——彼女はそれ以後、隣を伺う事をやめた。

「あはああん！ メイいくっ、イっちゃうよおっ♪♪」

ビュグドッ！ ビュルンッビュグビュグビュグッ！！！！

その日、彼女は野外で素人男性相手に肉便器となって犯されていた。何本かの作品を撮影し、完全にぶっ壊れてしまった彼女の最後の作品は、道行く素人にガチ種付けしてもらうという酷い内容だった。

「はひいあああ…～(はぁはぁ、次のひとお～♪)」

長蛇の列、避妊なしの生ぶち込みに容赦ない中出し。十分な撮影を終えたなら、そのまま捨ててスタッフは帰る。あとは彼女を気に入った男が一生面倒を見てくれる事だろう。

「…ゴクッ…」

ナツメは思わず息を呑む、その酷さに嫌悪感を感じる以上に恐怖で絶句するしかなかった。メイのその後の映像をわざわざ見せたのは、ペナルティを終えて表に再び女優として出演できるようになった彼女への警告だった。

——この次は、お前もこうなる、失敗は許さない…と。



「こ、このような物語の顛末は書きたくなどありませんッ」

シキミは懸命に抵抗するも、安々と野太い男の腕にその身を弄ばれていた。どんな行動をとって抗ってみせても、それすら逆にとられてしまう。

「なんてこと…んっ、このアタクシの花の時がこうして訪れる…ありえませぬわ」

己の今の境遇を嘆くカトレア。しかし抵抗はしなかった。シキミの様子から見苦しいマネだと思ったのか、およよと哀しげに目を伏せるのみだ。

「あ、アタシにだって選ぶ権利とゆーものがありますっ！ あっ、か…勝手に胸を掴まないでください！」

しかし、彼女の胸に男の手がどんどん食い込んでゆく。いやいやともがいても、まったく振りほどかれる事はなく、むしろガッチリとシキミのカラダは抱き寄せられた。

「ううっ！ いい加減にしてくれないと容赦しませんからっ。！？ いっ痛っ！！」

乳をというよりも、中の肉を搾り出すような強い握りに襲われ、胸は強烈に痛みを発した。大半が脂肪で構成されているとはいえ、当然神経も通っている。乱暴なオッパイ絞りは、痛烈に本人の心身へと響く。

「はぁはぁ、ううう…や、やめてよ。ぐっ、う、い、痛いって言ってるでしょっ、あっあっぐ！」

抵抗の意志を見せる限り、男は痛めつけてくるのをやめはしない。かといって、シキミもそう簡単に屈することなど出来はしなかった。

「あんっ、そのようなトコロを指で…んっ、うっ！ まあ、なんという事かしら？」

マンコに指が入り、入り口付近の腔壁を擦られる。ただそれだけの行為が、これほどの不可思議な衝動を自分に与えてくるなど、カトレアは知らなかった。

「はぁ、ううっん！ あっ、アタクシの花が散らされようとしているのに。あっあっ、この感覚はなんなのでしょう？」

一種の感動となって彼女の中を駆けめぐる性衝動。全身を打ち奮わせながら、未知への開花を予感して悦を浮かべている。

「ふうんっ！！？ あ、そのようにっ、なされるとっ！ はぁはぁ、アタクシなんか妙な感じにッ」

アソコをいじくられながら乳頭に吸い付かれる。オッパイは子供に母乳をあたえるものとしか習っていない、高い教養に未知に対処する方法を頼るカトレアにとって、性行為の幅広い作法を知らなかった彼女には、意外なほど胸への愛撫が効果的に効いていた。

「あふっ！ クスクスス、まるで大きな赤子のようですこと。んっ、あら、アタクシ…なんだか熱くなって…？」

彼女は、自分の発情のスイッチが入ってしまった事にも気づかずに戸惑う。そこへその惑う心をさらに焚きつけるように、生の男根が彼女に提示されるのだった。

「い、いやですよ！！ なぜアタシがアナタなんかとそんな事しなくてはいけないんですかっ、い、いやー！！」

男のペニスがいったいなんなのか？ ここで小便でも行うつもりなのかと不思議そうに見ていたカトレアの横で、シキミが大きな声をあげ、今まで以上に激しく抵抗して暴れていた。

「ううっ！！ そ、そんな事したらっ、あっあっ、子供できちゃうでしょっ！！？」

男がペニスを彼女の中へと挿入しようとしている。さらにシキミがあげた声から、カトレアはピンときたのか、得心したといった表情で、自分の目の前の相手のチンポを改めて観察した。

「なるほど、そういう事なのですか。ではアナタはアタクシに子供を作らせたいという事？ …あっ、そのように乱暴には」

その通りだといいながらカトレアに抱きつき、男は挿入を開始する。はいつてくる異物感是指の非ではなかったが、まだマンコをいじくられてあっただけ、インサートは予想できた行動だった。

「はぁっ、う、ああんっ！ ああ、なんてこと？ アタクシの中に、本当にあのような棒が入っている…あっう？！」

ただ挿入されるだけだと思っていた彼女は、急に男が腰を動かし始めたことに驚き戸惑った。自分の腹部の中を寄せて突いては退くを繰り返す行為に、その意味を知りたくて好奇心にかられるも、その余裕はすぐに消える。

「うあああっ！ や、やめてえっ、アタシのはじめてがっ！ あっあ、こ、こんなオトコにっ」

シキミも同じように、腰をふってアレをマンコの中で出し入れされているところを見ると、作法として間違いではない事は理解した。しかし、彼女の様子はとても嫌がっているようにしか見えない——ならばこれは間違っているのか、それとも忌むべき行動なのか？

「はぐっ、あんっ、ひぐううっ！！ はーはーっ、あん、あぐううっ、は…ああうっ！！」

聞いていて耳を覆いたくなるような悲鳴まじりの声。しかしそんな声を出してしまう理由が、直後にカトレアも理解する。

「っ、はぁはぁ、こ、これは、あああっ！ …結構、響いてきますコト…んっ！！」

徐々にカラダが高ぶって、激しいセックスにも快楽を生み出してくれるヴァギナだが、男のほうが出速にヒートアップしてしまうと、苦痛を生み出してしまふ。愛撫がもたらしてくれた熱をこえて激化したチンポの突きこみに、カトレアの花園も咲き誇る花を散らされて、苦痛を訴え出していた。

「ううんっ！ あっ、うっ、こ、このようにはしたくない、声っ、はっ、アタクシ…はぁはぁ、く、口にしたいくはありません、ですがっ」

獣へといざなう生物の根幹行為の一つ。それにさらされては、彼女も一匹の雌獣へと戻されようとしかたのない事だろう。少なくとも、苦痛から逃れんとしてカラダは芽生える獣欲を受け入れようとしている。

「はぁっ、あぁっ、あんっ！！ あ、アタクシったら、なんて、なんてお声をっ、で、でも、とまりませぬわっ、はぁあっ！！」

快感はまだ弱く、いぜんとして苦痛が勝る。にも関わらずみっともない喘ぎ声を吐きまくる口。行為を受けて、カトレアの子宮はすでに感じていた。生まれ持った己の使命を果たす時なのだ。それは強く彼女自身に働きかけて、脳ですら従わせてカトレアという人間を一時支配する！

「あああっ、こ、これはいけませんっ。きっと…い、いけない事ですわああーっっ！！！！？」

ドククンッ！！ トクットプッ！ ゴクッドグッゴブググウッ！！！！

快楽による現象ではなく、一生命体としての使命感が、彼女の子宮を膨らませる。——バルーン現象。

最高潮に快楽が達して、子種を自ら受け入れに走る変化が、快楽以外の理由でカトレアの胎内に生じる。蒼い瞳を瞬かせ、口を呆然と開いたまま、彼女は形容しがたい感覚に身を焦がしながら、注がれた液体が流れ出すのを、その股間で感じてまどろむ。



「あーあ、今日も疲れたなー」

「まったくだよ。上は人使い荒すぎんだよなー」

ガヤガヤと男たちが上司の文句を口にしながら宿の一室へと入ってくる。それぞれ個室を頼んでいるにも関わらず、全員が同じ部屋へと集まっていた。

「いろいろキナ臭いだろ最近の命令もよ？ あーあ、最初はポケモンの解放だのなんだのってさー」

「へっ、お前も真面目に正義感燃やしてたクチか？ でもまあ今となっちゃ汚れたもんよ、俺らもよ」

若き日の清く美しい志は消え去り、それを知っていても彼らは今の生活を止められない。それには理由があった――

「さーで、それじゃあ今日も楽しませてもらいましょーかねえ、シロナさんよっ」

男の一人が見慣れぬボール取り出したかと思うと、そこから人影が飛び出し、ベッドの上へと転がった。

「うーうーん。はぁはぁ、ま、またなのですか、いい加減になさってください――あう！！」

妖艶な下着姿の女性は、全身が赤らんでいる。まるで何時間もずで行為を行ったあとのように、憔悴していた。

「へへへ、すんげえスタイルの良さだぜ相変わらず。ホント、こんな便利なモン使えるだけでも役得だよなっ」

ボールの中では前に"戻された時の状態"を維持したままで、シロナ自身はほとんど時間の経過を感じていない。つまり、彼らに犯されてはボールの中へと仕舞われてを繰り返す彼女は、休みなく何日も犯され続けているに等しい状態にあった。

「はぁっ、はぁーうう、なんてこと。このままでは…たおれてしまいますわーんうっ！！」

爆乳を揉みしだかれても、鋭敏になったままの感覚が反射的に声をあげさせるだけで、もはやセックスに耐えうる体力など残ってはいない。

見るからに限界を越している彼女に、彼らはニヤニヤと笑いながらでその肢体をまさぐり続けた。

「メシでもくわせてほしいか？ なら俺たちに忠誠を誓え。一生ご主人様たちのペットになりますってなあ」

「そ、そのような…んんっ、あっ、はぁっ、うう…できるはずがありませんわ…っ、はぁはぁ」

だが息ひとつ吐くごとにどんどん全身から力が失われてゆく。アソコは開きっぱなしで、乳頭は勃起しっぱなしだ。発情状態が何日にもわたって続いた肉体は、彼女の心に彼らの要求を飲むことをしきりに求めてくる。

「はぁうっ、ん！ あっ、ひっ…はぁあっ！！」

「チュ―――…っ。チッ、まだ出ねえか。まあ早くても2、3ヶ月はわかんねえか、ひひ」

「こんないいチチもってんだ、はやいとご孕ませてやろーぜ、へっへ」

いまの乳吸いでさらに体力は奪われた。鼓動が激しいリズムを乗り越えて不安定に打ち鳴らされる。ボールが怪しい色の放電現象を発するごとに、カラダに走るビリッとした感覚――

性感帯をほんの少しも鈍らせまいとする、もはや監視の目に等しいボールが憎らしい。

「あはあ、はぁ…あう…こ、このような…事が…、はぁはぁ、うう…あたしは…ですが……」

「なんだあ？ ついに壊れてきちゃったかあ？」

「おいおい、こんないい女、そうそういないんだからよ。もっと大切に扱えよ、ひゃっはは」

いわずともシロナは限界に近かった。だが、屈してしまうわけにはいかない。男たちにしろ、彼女が簡単に屈するような女でないことを知っているからこそ、こうまで手ひどく追い詰めているのだ。

「そーら、今日もしっかり種付けてやる。ありがたく思えよっ！！」

ズンッ！

さしたる腔壁の抵抗もなく最奥を叩くペニス。しかし、男根がズッポリとハマりきると、マンコはそれを待ってギュッと締め、男とシロナの結合をロックした。

「ふぐうう…うっ、うう。はぁ、はぁ、ぜえ、ぜえ…んうあっ！！」

「へへ、カラダはすっかり俺たちの言いなりだなあ？ そら、そらっ、今日も寝かせねえぞっ」

全身はほんの10センチ前後のストロークで揺れ動かされているだけだが、彼女の視界は部屋中を飛び回った。定まらない意識は、いつ吹っ飛んでしまってもおかしくないほどに、限界ギリギリの状況で踏みとどまっている。

「んうっ、はぁっ、ふぁあっ。はっ、ふっ、はっ、んうっ、し…むう…、きゅう、そくを…、はぁはぁ、ぜえぜえっ」

一見すると血色よく見える肌も、発情による血流の加速によるものでしかなく。もしこの血の流れがゆるまったなら、その肌はたちまち青白くになってしまうだろう。腹上死の危機を、快楽という安易ながら多くを捨てなくてはならない逃げ道と共に、シロナはリアルに感じはじめる。

「はぁあっ、あうっ、ふううっ、うんっ、んうっ！！ はっ、はっ、ふっ、ああっ……」

「へへ、このままマジでイっちまってもいいんだぜえ？ また代わりを探せばいいだけだしな、オレらはよ」

男たちにとっても賭けだった。彼女ほどの女ともなれば手放したくないのが本音だ。しかし、その弱みを見せればいつまでたっても彼女を完全にモノには出来ないだろう。

肉棒はマンコを陥落している。だがこれはギリギリの、精神の勝負だった。

「はー、はー、んっ、あっ…う、う…、お願い…やす…ませ、はーはー、ううっ、このままでは…本当…に…」

「！ …だったら言うべき事があるんじゃないかなー、んん〜？」

言いながら男は思いっきり乳房を握り搾った。同時に腰を加速させて、思いっきり突き込む。

「んぐうう！！ はーはーっ、…う…、あ…、あ、あたしは…はぁはぁ、み、皆様の…うう…ペットに、なり…ますうっ！！」

瞬間、ボールの放電が止む。かわりに中央の輝きが増した。

すると、途端にマンコ内のうごめきに変化が生じる。これまでの無理矢理に犯されていた腔が、チンポに媚びるようにザーメンを搾りはじめた。

「よく言った！ これでお前は俺たちのモンだっ、へへ、ずーっとかわいがってやっからよ、しっかり孕めっ！！」

「あ、あああっ、はぁはー、い、イってしまっ…っ、イってしまいますわぁあっ！！！！」

ズビュボッ！ ビュグルッビュドッ！！ ビュゴバボブボッオ！！！！

男たちによって完全にゲットされてしまったシロナは、胎内に次々とその証の精子を詰め込まれる。とくぎはパイズリ、繁殖、奉仕…

どんどん登録される彼女の情報は数百項目におよび、一切を彼らに知られる。

ギリギリで一命を取り留めても彼女は一生、彼らの女として子を生み、快楽を貪らせる日々を送る事となった…